



TITLE:

遠軽日食観測の印象(I) (日食報告號)

AUTHOR(S):

高城, 武夫

CITATION:

高城, 武夫. 遠軽日食観測の印象(I) (日食報告號). 天界 1936, 16(184): 394-395

ISSUE DATE:

1936-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167274>

RIGHT:

遠輕日食觀測の印象 (I)

第3日食觀測隊 高城武夫

1. 目的地へ

去る5月28日、天文臺で山本博士より日章旗を授けられ、第3觀測隊の印綬を帶びて、この日午後、愴惶として京都を發つた。この時同行は大阪より馳せ參じてくれた大口周作氏1人。目的地は北見國遠輕、行程約2000杆の鐵路を急行する。

途中、東京を經由し、仙臺にて山本進氏と驛頭にて打合せをなし、愈々北海道へ渡る。

函館を出てより驛頭に求める道内各種の新聞紙上の日食記事などを見て我々も、いよいよ「日食地」へ來たと云ふ感じで相當緊張を覺える。札幌までの車中、ふと傍らに同乗した白髪の異老人と談合することになった。この方は神學博士ジョン・パチエラ1翁であつた。(アイヌを世界に紹介せし恩人)、翁は恰も40年前札幌で日食を觀望され、當時アイヌ人達が、實に奇妙なる身振りで、病める太陽に向つて息を吹きかけるやら、水を撒き揚げるなどの珍景を眺めた……と云ふ想出話で呵々大笑、車中の一隅を賑はせらる。又車窓外の風景を説明されるなど、旅中何よりも無聊を慰められたが、札幌驛で名残りのお別れをした。

我々もこの地で下車し、僅かの時間を利用し直ちに札幌神社へ參詣、祈願を込める。かくて漸く旭川へ、此處は9分8厘食と云ふキワドイ分食が見られる處だが驛前に大きな日食地行の勧誘看板が立てられて居るなど、さすが日食への相當關心が深められて居る事を知る。此處より愈々最後の線路へ乗込んだ。速度の遅い、停車時間の長いまだ數時間だ。白樺の林、蝦夷松の森、峽谷、トンネル、遠山の雪、珍しき景色の中に、憧れの遠輕は何方にと相當乗り飽きた31日の夕、漸く「えんがる」の驛名を聞くことが出來た。我々は出發時刻の都合で、そして約束の到着日時に合はしたため、旅中の時間が少し長くかつた事だつた。

驛ホムにて白髪白髯の嚴然たる歡迎委員長宮城町長、副委員長須子助役、同鈴木家庭學校長代理を始め、その他の委員の方々、外、官民多數の方々の出迎へを受ける。即ち遠軽町の人々のこの日食に對する熱心と、その歡迎の熱誠を見、こゝに初て喜悅と感激の第一歩を遠軽の地に降ろした事だつた。驛頭にて記念撮影をなし、直ちに車を走せてこの町を30町余離れた下サナブチの里、我々の觀測場家庭學校へ入る。校内深くにて車を捨て、早速嘗て山本博士の檢分撰定されし觀測臺を觀る。打見た處、實に廣大な校内地所で、ゆるやかなスロップを持つた丘の上の200坪程の平地である。食太陽を臨む西方の見晴し又絶好、この臺地の南方に續いて我々の宿舍に提供された「樹下庵」が在る。申分がない。實に好い處へ來たものだと思つた。此處で、學校職員生徒の出迎を受けた。氣溫は思つた程の寒さもない。關西地方の春の候である。氣持よい夕暮を眺めつゝ旅裝を解く。樹下庵はこの學校の客用の宿舍である。飲料水は豊富、浴室もある。立派な洋風の應接室が西北に續いてゐる。我々は早速この室を觀測事務所に當てた。此度この宿舍の主婦として同校教員泉秀子女史が、特に我々一切の面倒を見て下さる事になつて居る。觀測荷物、望遠鏡其の他の全ては整つた。幸ひな事にこの學校に暗室まであると云ふので、數丁距つた學校事務所内の暗室を見に行く。二重扉でこれも申分ない。北海道へ來た他の隊とは餘程後れて到着した事であり、日食まで2週間餘の時日なればとて、早々實地布陣の計畫を建て、店開きをすることになつた。この時、京都山本臺長宛、無事着の打電をなしたに對し、その翌朝、「シユツパツニサイセイコウヲイノル」の返電を受け、愈々山本博士一行のシベリア遠征を知り、コロナ變動寫眞のシベリア、滿洲、遠軽の3地點に於ける協同觀測としての、自隊の重要性を思ひ、且つ他の2隊の無事成功を祈念した。

晝に歸へる鳥の聲、林中に鳴く郭公の聲等山彦の如く聽え、觀測地での第1夜を迎へた。(つゞく)